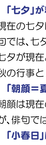

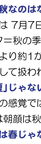

認知科学を学習に。

6色マーカー学習法®

短歌・俳句対策～五ツ木模試対策～

2学期を迎え、受験生にとっては志望校を決定するいよいよ重要な時期となりました。

今回のテーマは「短歌・俳句」です。特に2学期最初の五ツ木模試の国語では、「短歌・俳句の鑑賞」が出題されます。

特に「短歌・俳句の鑑賞問題」は配点が高く、その出来によって偏差値が大きく変わってきます。定番の出題パターンと、得点に直結する解き方のコツを分かりやすく解説していきます。

季語の抜き出し～間違えやすい「季語」まとめ～

次の季語の季節を答えなさい。

① 五月雨 ② 霞 ③ 霜 ④ 露
⑤ 霧 ⑥ 七夕 ⑦ 蛙 ⑧ 雨蛙
⑨ 月 ⑩ 雪解け ⑪ 月 ⑫ 若葉
⑬ 小春日 ⑭ 梅雨 ⑮ 時雨 ⑯ 菊
⑰ 吹き流し ⑱ ところてん ⑲ 朝顔

解答

① 五月雨（夏）、② 霞（春）、③ 霜（秋）、④ 露（秋）
⑤ 霧（秋）、⑥ 七夕（秋）、⑦ 蛙（春）、⑧ 雨蛙（夏）
⑨ 月（秋）、⑩ 雪解け（春）、⑪ 月（秋）、⑫ 若葉（夏）
⑬ 小春日（冬）、⑭ 梅雨（夏）、⑮ 時雨（冬）、⑯ 菊（秋）
⑰ 吹き流し（夏）、⑱ ところてん（夏）、⑲ 朝顔（秋）

いくつできましたか？

「ところてん」を知らない人は近所のスーパーで見つけてみてね！

ところてん（夏）

季語を間違えやすいのは今と季節がずれるから。

春（2～４月） 夏（5～７月）、
秋（8～10月） 冬（11～１月）

だから「五月雨」は夏になります。

「七夕」が秋なのはなぜ？

現在の七夕は 7月7日＝夏 ですよね。ところが俳句では、七夕＝秋の季語です。これは、昔の暦では七夕が現在より約1か月後ろの時期にあたり、初秋の行事として扱われてきたためです。

「朝顔＝夏」じゃないの？

朝顔は現在の感覚では、夏の花ですよね。ところが、俳句では朝顔は秋の季語として扱われます。

「小春日」は春じゃないの？

初冬（11月、12月頃）の訪れとともに訪れる、春のように暖かく穏やかな晴天のことです。だから季節は冬です。

次の俳句を春、夏、秋、冬の順に並べなさい。 **※五ツ木の定番問題**

A 小春日や 石を噛み居る 赤蜻蛉
B 朝顔の 双葉のどこか 濡れゐたる
C 雪解けて 村いつぱいの こどもかな
D ところてん 煙の如く 沈み居り

答え C ⇒ D ⇒ B ⇒ A

A 小春日や 石を噛み居る 赤蜻蛉（冬）
B 朝顔の 双葉のどこか 濡れゐたる（秋）
C 雪解けて 村いつぱいの こどもかな（春）
D ところてん 煙の如く 沈み居り（夏）

句切れ ～切れ字はきちんと覚えてる？～

句切れとは、意味や気持ちがいったん区切れる場所のことです。ポイントは、「息つぎ」ではなく、「意味が終わる場所」を探すことです。

① 意味上での見分け方

「。」が入る場所を探そう！文を読んで、「ここで文が終わるな」と思う場所が句切れです。

例①

柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺

柿食えば。／鐘が鳴るなり法隆寺。
五音で意味が切れるので→ **初句切れ**

例②

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の…

春過ぎて夏来にけらし。／白妙の…
十二音で意味が切れるので→ **二句切れ**

例③

田子の浦ゆ うち出でて見れば 白妙の
富士の高嶺に 雪は降りつつ

最後まで一つの文になっています。→ **句切れなし**

② 切れ字で見分ける！

切れ字・・・ぞ・なむ・や・か・こそ・なり・けり・かな。

など切れ字がないかを確認する！

例①

古池や 蛙飛びこむ 水の音

松尾芭蕉の有名な俳句です。この「や」が切れ字です。「古池や」で一度意味が切れます→**初句切れ**

例②

柿くへば｜鐘が鳴るなり｜法隆寺

正岡子規の句です。二句目の最後の「なり」が切れ字です→**二句切れ**

形で見分けるコツ

句切れになりやすい

終止形	～けり、らし、なり等
切れ字	や、かな、けり
命令形	～せよ等

句切れになりにくい

格助詞	の・が・を・に・へ・と
接続	～て、
連体形	～の、～る等名詞に続く形

次の句切れを答えなさい。

A ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめて心顫ひそめし日
B 背おひたる垂穂のおもみ百姓はたへつつあゆむ一足ひとあし
C おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く
D 山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり

A ヒヤシンス/薄紫に/
　咲きにけり/はじめて心/顫ひそめし日

「けり」は助動詞の終止形なので三句切れ

B 背おひたる/垂穂のおもみ/
　百姓は/たへつつあゆむ/一足ひとあし

「あゆむ」は動詞の終止形なので四句切れ。
最後の「一足ひとあし」は倒置が使われている。
本来は「一足ひとあしたへつつあゆむ」

C 山道に/昨夜の雨の/
　流したる/松の落葉は/かたよりにけり

「流したる」は次の「松の落葉」にかかっているので連体形で切れない。
途中で切れるものがないので句切れなし。

D おり立ちて/今朝の寒さを/
　驚きぬ/露しとしとと/柿の落葉深く

「つ」「ぬ」「たり」「り」は完了を表す助動詞の終止形
この場合「驚きぬ」で一旦切れるので三句切れ

表現技法まとめ

① 体言止め：文の終わりを、名詞で終わらせる。

鳥帰る / 遠き山辺の / 春の夕暮れ

この場合、最後が「夕暮れ」という名詞なので、体言止めです。普通なら、「春の夕暮れだ。」「春の夕暮れ

② 枕詞

枕詞は、①特定の言葉にかかる。②主に和歌で使われる。③五音のものが多い。④現代語に訳しても、はっきりした意味がない場合もある。という特徴が

絶対に覚えておきたい枕詞

① あしひきの → 山 ② あらたまの → 年・月・日
③ ぬばたまの → 夜・黒・髪 ④ たらちねの → 母
⑤ ちはやぶる → 神 ⑥ くさまくら → 旅
⑦ ひさかたの → 光・天・雨・月 ⑧ たまきはる → 命
⑨ あをによし → 奈良 ⑩ しろたへの → 衣・袖・雪

③ 比喩

「～のようだ」「～のような」など。
雪のように白い→ 直喩（「ような」「みたいな」を使用）
君は太陽だ→ 隠喩
※短歌・俳句では「如く」が直喩として使われる。

アーク進学会